

1 調査目的等

・義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
 ・そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
 ・学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

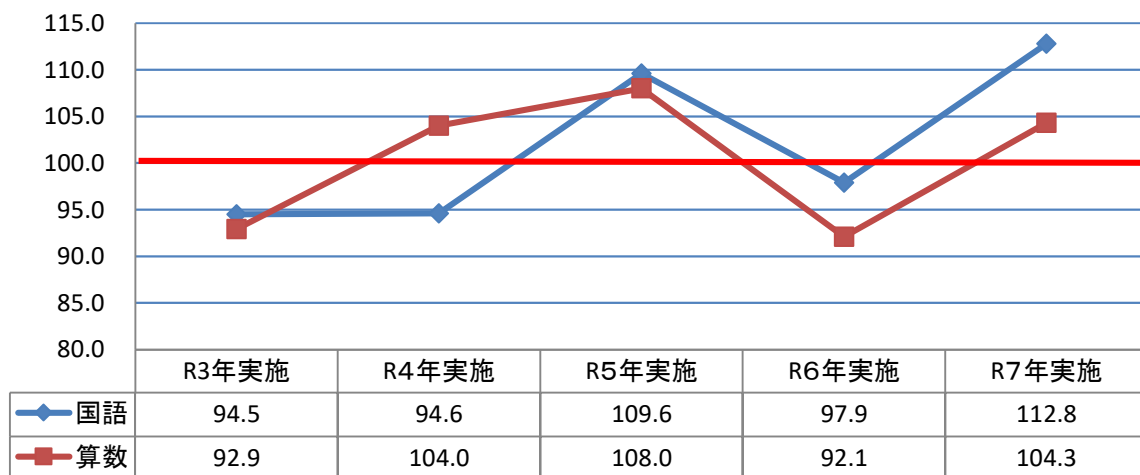
2 学校における学力向上に向けての取組

- ☐ 毎月1回の授業評価アンケート(児童)、授業チェックリスト(教師)の活用
- ☐ 「書く活動ポイント9」を活用するための研修の実施及び共通理解、共通実践
- ☐ 算数科におけるA・B層が解きごたえのある「チャレンジ問題」の位置付け
- ☐ 誰一人取り残さないようにするための習熟度別指導などの単元構成の工夫
- ☐ 単元テスト通過率の短いスパンでの見取り(トリプル80)をととした授業改善
- ☐ 「未来への一歩」の取組、漢字検定・算数検定の取組の実施
- ☐ 家庭学習における個に応じたAIドリル等の活用(言葉に関する事項)

3 調査結果(全国の平均正答数を100としたときの標準化得点)

	国 語	算 数
本校	112.8	104.3
嘉麻市	91.5	83.9
全国	100	100

推移



4 各学校における分析

【国語】学力四分位層の割合：A層44.5%、B層22.2%、C層16.7%、D層16.8%

□授業において、条件に合わせて考えを書くことを意識して取り組んできたことによって、書く内容を中心を明確にした文章構成の工夫と、自分の考えが伝わるような書き表し方について理解する力がついてきた。しかし、実際に記述をする問題では、C層・D層の児童を中心に、目的や意図に応じて自分の考えを書いたり、文章や図表から必要な情報を見付けたり、関係付けたりする力に課題が見られた。

【算数】学力四分位層の割合：A層39.0%、B層11.1%、C層33.4%、D層16.7%

□授業において、チャレンジ問題に取り組んだり、条件付記述式問題の練習に取り組んだりしてきたことによって、「数と計算」、「測定」、「変化と関係」、「データの活用」の領域の平均正答率が、全国平均よりも高かった。しかし、A・B層とC・D層の割合が同等となっており、二極化が見られた。特に、C・D層の児童は、式や言葉を用いた数量や図形の面積の求め方について書く力に課題が見られた。

5 各学校における今後の取組

□上記の「2.学校における学力向上に向けての取組」については、継続して行っていくとともに、「4.各学校における分析」を受け、これから重点的に取り組む内容を3点に絞り、学校で組織的・継続的に行っていく。

(1)国語科及び算数科の授業において、「わけ(根拠)」や「学習の振り返り」をノートに書かせたり、発表させたりする場面の設定(1日1時間以上)※書く活動point9の活用等

(2)算数科の授業において、「誰一人取り残さない授業の取組(習熟度別学習、単元途中の形成的評価と総括的評価)」の設定※週案への「クリア問題」の記入

(3)主体的に学習に取り組む態度の向上のために、子どもたちが単元の途中又は終末段階において、習熟度に応じて自ら課題を設定し、解決方法等の自己選択を行う場面の設定

※タブレットドリルの活用等

6 嘉麻市教育委員会としての今後の取組

○子どもが進んで問題解決を図る授業づくりを推進することで、主体的に取り組む態度とともに、思考力・判断力・表現力の育成を図る。

○小・中・義務教育学校とも、単元テストをもとに短いスパンで評価することを通して、一人一人の学習の定着状況を見とるとともに、個に応じた授業づくりを推進し、C・D層の子どもの学力向上を図る。

○家庭学習の充実や帯学習の取組など、組織的な学力向上の取組を構築することを通して、基礎基本の定着を図る。